

## 『椿説弓張月』と二系統の「楊家将演義」小説

### Chinsetsu Yumiharizuki and two novels of Yangjiajiang Yanyi

平原 真紀

In this paper, at first, I summarize the outline of *Chinsetsu Yumiharizuki* [*Strange Tales of The Crescent Moon*], one of the representative works of Yomihon [long lecture history novels in early modern Japanese literature], including the circumstances at the time of its publication and an explanation of the book title. In addition to *Chinsetsu Yumiharizuki*, *Bei Song Zhizhuan* [*Record of the Northern Song*] which is one of the two novels of *Yangjiajiang Yanyi*, and *Nan Song Zhizhuan* [*Record of the South Song*], the first part of which is *Nan Song Zhizhuan*, there are Chinese poems in common with *Chinsetsu Yumiharizuki*. In this paper, I will investigate the relationship between *Chinsetsu Yumiharizuki* and the two novels of *Yangjiajiang Yanyi*, taking into consideration the fact that I confirmed in the previous chapter that there are many similar characters, plots, passages, and motifs in the other *Yangjiafu Yanyi* novel.

Next, I reconfirm the outlines of the necessary parts of the two systems of *Yangjiajiang Yanyi* novels, the relationship between the two systems of plates, and the results of the research on the transmission of the two systems to Japan in the early modern period. In particular, I found that thirteen inserted poems from *Nan Song Zhizhuan* and *Bei Song Zhizhuan* were borrowed without specifying their source in the fifteen poems at the beginning of Bakin's *Chinsetsu Yumiharizuki*, that the method of borrowing was very similar to that of the compiler of *Yangjiafu Yanyi*, Ji Zhenglun, and that the existence of related books such as "*Yangjiafu* etc. Biography" was mentioned in the notes to *Bei Song Zhizhuan*. In addition, there is a similarity between the two novels, and the fact that Bakin must have seen them.

Furthermore, the settings, motifs, and views of good and evil that are common to both novels are common to *Yangjiafu Yanyi*. In this paper, I will discuss the possibility that *Yangjiafu Yanyi*, one of the novels of *Yangjiajiang Yanyi*, was accepted in *Chinsetsu Yumiharizuki*.

【キーワード】椿説弓張月、曲亭馬琴、江戸文学、読本、楊家将演義

*Chinsetsu Yumiharizuki* [*Strange Tales of The Crescent Moon*], Bakin Kyokutei, Edo Literature, Yomihon [long lecture history novels in early modern Japanese literature], *Yangjiajiang Yanyi*

### はじめに

この書、保元の猛将八郎為朝の事跡を述ぶ。

その談唐山の演義小説に倣ひ多くは憑空結構に成。

閱者理外の幻境に遊ぶとして可なり。

『椿説弓張月』前編冒頭題詞

近世日本文学において、初めて唐山の演義小説の体裁を整えた長編講史小説といえば、曲亭馬琴著

『鎮西八郎為朝外伝 椿説弓張月』<sup>1</sup>(以下『椿説弓張月』と称す)であろう。前掲題詞に記載の通り、この『椿説弓張月』は、曲亭馬琴が唐山(中国)の演義小説の構造を倣って執筆した初の読本作品である。物語は、軍記『保元物語』に登場する、巨漢で美男子の弓の名人とされる源氏の御曹司、鎮西八郎為朝を主人公として虚実を交えた活躍と悲劇を描く。周知の通りこの物語は、史実では配流先の伊豆大島で官軍に攻められた挙句、無念にも自害して果てたはずの為朝が生き延びており、琉球へと渡って時の琉球王朝の乱れを平定し、最後には為朝の息子が王位を継承するというあらすじを有している。

『椿説弓張月』という作品については、同じ馬琴作品である『南総里見八犬伝』と比較する時、その論考の数では及ばないが、従来多くの先行研究により「一代記構想」<sup>2</sup>をはじめとして、「琉球との関係」「謡曲」「作品構想の変化」「中国小説との関係性」など、多角的に議論を重ねられてきた。橋本眞一氏によると、近年の研究は、「日本編」と「琉球編」に分けられるものの、共通するテーマが存在すると述べている<sup>3</sup>。また、馬琴は洋の東西を問わず、豊かな外国知識を持ち、文化年間(1804~1818)以降から天保期(1831~1845)に至るまで、外国の情報を集め続け、当時においては高度に正確な外国知識を持っていたともされる<sup>4</sup>。この馬琴の外国知識や外国観より、『椿説弓張月』という作品は、外国の脅威を実感する馬琴が日本の辺境へと目を向けて書いた作品でもあるともされる。

また、馬琴の読本作品の中でも、この『椿説弓張月』などの所謂「史伝物」は、馬琴を代表する作品群であり、勧善懲悪や因果応報といった儒教仏教の思想が色濃く描き出されていることが夙に知られている。高藤武馬氏によると、馬琴自身は武士階級の出自ながら、自分は市井の通俗文芸作家に成り果ててしまったという思いを忘れることができず、皇室中心・神仏崇敬・武士道賛美が常に作品に込められていたと述べている。また、戯作者としての思いは常に高く、戯作を通して衆生を教化することをもって、物語の根本義と考えていたために、不遇の英雄や歴史に埋もれた人物を自身の作品において活躍させたのではないかと述べている<sup>5</sup>。

一方、これら先行研究の中で、「中国小説との関係性」においては、本作品が唐山の演義小説に習って荒唐無稽な妖怪や妖術を含むプロットや情節を多く有していることなどから、『三国演義』や『水滸伝』、『水滸後伝』等を粉本として挙げる先行研究がすでに多く存在する。そして、それらの粉本となる唐山の演義小説へも目を向けたとき、この演義小説と称される一群の長編講史小説の中には、前述の『三国演義』や『水滸伝』、『水滸後伝』、などと比較・対比される白話小説作品が他にも数多く存在する。明代の嘉靖・万暦の時代には、紙すき技術の向上と印刷技術の更なる発展により、科挙関連書籍をはじめ多くの書籍が刊行された。白話文学においても、この空前の出版ブームの中で様々な作品が陸続と出版され、絶大な人気を博す作品も数多く生み出された<sup>6</sup>。これらの白話小説は、他の書籍群と一様に唐船などに舶載され、長崎の出島経由や朝鮮半島から対馬経由、または琉球貿易などを通じて、潤沢とは言えないまでも、ある程度の冊数が近世日本へも渡来したのである<sup>7</sup>。

1 『椿説弓張月』については、坪内逍遙・水谷不倒共編『近世列伝体小説史』上下巻(曉霞居士「曲亭馬琴」を含む)春陽堂 1897.5、藤岡朔太郎「近代小説史」大倉書店 1917.1、「馬琴の研究」藤村作・新潮社版日本文学講座第十巻所収 昭6、麻生磯次『滝沢馬琴』人物叢書・日本歴史学会編集・吉川弘文館 1987.10(初版昭18)、衣田学海『椿説弓張月細評』帝国文庫 39・1899、後藤丹治校訂『椿説弓張月』上下巻・日本古典文学大系・岩波書店、1958.8-1962.1、などを総合的に参照した。

2 中村幸彦『中村幸彦著述集 第5巻』中央公論社 昭57などを参照。

3 橋本眞一「『椿説弓張月』論」『日本文学研究』(46)大東文化大学 2007.2

4 橋本眞一「曲亭馬琴伝記小攷―曲亭馬琴旧蔵本『鎖国論』・石川豊翠旧蔵本『松窓雜録』について」『読本研究新集』第二集・読み本研究の会・翰林院書房 2000

5 高藤武馬訳『椿説弓張月』古典日本文学全集 27 筑摩書房 1960.8

6 万暦年間の背景については、小松謙『中国歴史小説研究』汲古選書 平成13に詳しい。

7 大庭脩著者兼編輯著『江戸期における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所 昭42に詳しい。

であるならば、馬琴が『椿説弓張月』を執筆する際に参照した白話小説は、前掲の三作品以外にも確認できるのではないだろうか。本稿において取り上げる二系統の「楊家将演義」小説、『北宋志伝』（『南宋志伝』を含む）と『楊家府演義』<sup>8</sup>もこうした作品のひとつである<sup>9</sup>。書籍名としての『楊家将演義』とは、五代十国時代に北漢から北宋へ投降し、その後は北宋の武将として活躍、「楊無敵」とまで称されるも味方の裏切りによって非業の最期を遂げた<sup>10</sup>、名将・楊継業<sup>11</sup>（楊業とも称す）とその一族郎党が活躍する、中国は明代に刊行された長編講史小説の総称である。この、一般に『楊家将演義』と称される書籍には、中国は明代に現存最古の板本<sup>12</sup>として異なる二系統の小説を確認できる<sup>13</sup>。一つは、福建は建陽の敏腕編集者・熊大木<sup>14</sup>による編次『北宋志伝』（『南宋志伝』を含む）であり、もう一方が、南京在住の不遇の文人・紀振倫<sup>15</sup>により編纂された『楊家府演義』である<sup>16</sup>。

これら『南宋志伝』や『北宋志伝』に記載されている複数の挿入詩の借用を、曲亭馬琴の『椿説弓張月』の冒頭題詞の中に確認した<sup>17</sup>ことから、この二系統の「楊家将演義」小説もまた、その可能性を有する作品の一つではないか、と推測するに至った。確かに、「楊家将演義」は、日本における認知度が高いとは言いが、何より『水滸伝』成立に大きな影響を与えたとされる作品でもある。特に、「楊家将演義」小

- 8 本稿において使用する主要テキストのうち、内閣文庫附『新刊出像補訂參采史鑑南宋史傳通俗演義』題評十卷五十回、同『北宋』十卷五十回（世徳堂刊本）の板本と、台湾国立中央図書館編印歴史通俗演義所収『楊家府世代忠勇通俗演義志伝』の板本は、どちらもデジタル資料データを東京大学東洋文化研究所の上原究一氏より賜ったものである。また、二系統の板本間の異同等の参照には、国立国会図書館所蔵・経国堂『玉茗堂批點繡像南北宋志傳』、北京大学所蔵・維経堂『玉茗堂主人按鑑批點南北宋志傳』、東京大学所蔵・天一出版社『全像按鑑演義南北宋志傳』、上海古籍出版社『楊家府世代忠勇演義志傳』、国立国会図書館所蔵『鐫出像楊家府世代忠勇演義志傳』などの板本を適宜使用する。尚、両板本の共通点については、平原真紀「二系統の明刊本「楊家将演義」小説における共通底本の可能性—『北宋志伝』と『楊家府演義』の二系統をその対象に—」『樹間爽風』和漢韻文研究会 2021.12.25 に詳しい。
- 9 明代刊行の二系統の「楊家将演義」小説、『北宋志伝』と『楊家府伝』の概要と関係性については、平原真紀「小説『楊家将演義』再考—《北宋志伝》と《楊家府伝》」『中国俗文学研究』中国俗文学研究会 2013.4 に詳しい。
- 10 『宋史』では、宋軍を率いた出征中に契丹の大群に遭遇し、激闘の末に捕縛されるも節を守り、食を断って死んだとされている。
- 11 大塚秀高氏が、『楊家将演義』に関する戯曲や小説と史実による呼称の区別に言及し、史実においては「楊業」、戯曲小説を論ずる際には「楊継業」との表記と述べているように、「楊業」の呼称には、「楊業」以外にも「楊継業」や「楊令公」など複数存在する。本稿では、史実に関する論考も取り上げることから、楊家第一世代の登場人物の呼称は「楊業」とする。（大塚秀高『『楊家将演義』前後の歴史小説』『楊家将演義 読本』2015.6）
- 12 「板本」には、「版本」との表記も見られるが、本稿においては木板を使用し印刷された本として「板本」の表記を使用する。この唐代からの印本技術と表記については、井上進『中国出版文化史』名古屋大学出版会 2002.1 に詳しい。
- 13 二系統の板本差異については、「二系統の明刊本「楊家将演義」小説における共通底本の可能性—『北宋志伝』と『楊家府演義』の二系統をその対象に—」『樹間爽風』和漢韻文研究会 2021.12.25 に詳しい。
- 14 熊大木（約 1506-1578）の生平については、常毅氏が「元明期「楊家将」戯曲小説研究」『暨南大学』2005 で詳細に考証している。熊大木は、嘉靖年間当時の中国における出、版業の中心地の一つに数えられる福建・建陽の書房の主人であり、八十有余軒の専業の書肆が軒を連ねていた同地において、三本の指に数えられる大出版元であったという。また、この熊大木の機を見るに敏な商才は、現代中国においても「熊大木モデル」という経済用語が存在するほどである（平原真紀「明刊『北宋志伝』板本による楊家将小説の完全邦訳」『東方』2016.1）
- 15 紀振倫（生没不詳、字は春華、号は秦淮墨客、江寧出身）については、常毅氏前掲書において、下級文人で非常に文化的教養度の高い人物として、様々な「楊家将演義」小説群の解説部分に、本作品の校閲者、時には作者として記載されていると述べている。また、紀振倫は、『統英列伝』と始め、戯曲伝奇である『葵花記』、『三桂記』、『折桂記』、『七勝記』など、多くの作品の編纂や校閲者として、真面目で頑なな編纂態度と、時として憤懣に近い語気の序を記していることなどが知られている。他にも明代の後期に出版された書籍の中に、著者、編纂者、或いは批評家としてその名前が記されている。（平原真紀「明刊『北宋志伝』板本による楊家将小説の完全邦訳」『東方』2016.1）
- 16 『北宋志伝』（『南宋志伝』を含む）と『楊家府演義』の概要については、平原真紀「明刊本《楊家将演義》小説の基本問題—《北宋志伝》と《楊家府伝》の二系統とその対比—」『言語・地域文化研究』東京外国語大学大学院博士後期課程論叢 第20号 2014.1 に詳しい。
- 17 平原真紀「近世日本に於ける「楊家将演義」小説の伝来」『東京外国語大学国際日本学研究所』2021.3

説と『水滸伝』の関係性については、前出中鉢雅量氏の論考をはじめ、いくつもの専論がその関係性について研究成果を発表している。その研究成果としては、両作品が共に北方の遼と対峙する北宋時代であり、『水滸伝』における征遼の段が「楊家将演義」の影響を受けて成立したとする点、また、『水滸伝』に登場するプロットが「楊家将演義」から影響を受けて成立したとする点、などを代表的なものとして挙げることができる。

また、そもそも中国の白話小説とは、宋代の大都市部に設立された瓦舎や瓦市などの通俗文芸を扱う口誦芸能から発展したものである<sup>18</sup>ということを鑑みる時、これまでの先行研究において述べられているように、白話文学全体におけるプロットの構成や人物の形象が、様々な形で互いに影響し合っ  
て成立しているのも当然であろう。本稿においては、明代刊行の二系統の「楊家将演義」小説と『椿説弓張月』について、両作品の内容や構成を対比し、両者の関係性を更に詳細に探っていく。但し、本来ならば、ある作品における他作品の受容に関して考察をおこなう際、受容作品からの視座によって考察をおこなうのが一般的だが、筆者の元々の研究対象が「楊家将演義」小説であり、この二系統の小説が近世日本でどう受容されたのか、の研究過程において発見・確認した点も多いことから、本稿においては「楊家将演義」小説側からの考察とする。

### 1. 『椿説弓張月』と「楊家将演義」小説との接点

まず、曲亭馬琴<sup>19</sup>の『椿説弓張月』について、その出版状況を整理しておく。『椿説弓張月』は、「鎮西八郎為朝外伝」の角書きがあり、正式名称としては『鎮西八郎為朝外伝 椿説弓張月』と称す。作者は曲亭馬琴、作画が葛飾北斎による全五編二十九冊の読本で、初版刊本版元は平林庄五郎、並びに、文刻堂西村源六である<sup>20</sup>。『椿説弓張月』は、文化四年(1807)から文化八年(1811)にわたって刊行されており、それぞれ、前篇、後篇、続篇、拾遺、残編、の全五篇から成り立ち、葛飾北斎による挿絵となっている。半紙本全二十八巻六十八回の内訳としては次の通り。

前篇	六巻	六冊(合二冊)	文化四年(1807)一月刊行(文化二年十一月～十二月稿)
後篇	六巻	六冊(合一冊)	文化五年(1807)一月刊行(文化四年三月～九月稿)
続篇	六巻	六冊(合一冊)	文化五年(1807)十二月刊行(文化五年三月～八月稿)
拾遺	五巻	五冊(合一冊)	文化七年(1809)八月刊行(文化六年冬起草)
残篇	五巻	六冊(合一冊)	文化八年(1810)三月刊行(文化七年三月～五月稿) <sup>21</sup>

18 瓦舎や瓦市と通俗文芸に関しては、大木康『明末江南の出版文化』研文出版 2004.5 に詳しい。

19 曲亭馬琴の先行研究については、青木稔弥氏・大洋洋氏の両氏によって、1993年に纏められた「曲亭馬琴研究文献目録」を継いで、坂坂則子氏により纏められた「曲亭馬琴研究文献論文」1988~1997)『専修国文』(通号64)1999.01 国立国会図書館デジタル <http://id.ndl.go.jp/bib/000000013618>、または、専修大学内人文系データベース <http://www.senshu-u.ac.jp/School/kokubun/kotengakka2/itasaka-bunken.htm> に収録の曲亭馬琴関連の論文や資料を参照させて頂いた。本データベースは曲亭馬琴研究の成果を、影印・翻刻・注、研究論文や年譜、短文の報告書類なども含め、500以上の資料について1988年より一年ごとに纏めて収録している。これにより、高田衛「馬琴・南北における一典拠」『都大論究』25.1988、高木元「江戸読本の形成—貸本屋の出板をめぐる—」『文学』56『江戸読本の研究』1995、土岐和美「読本における『水滸伝』の受容—『八犬伝』及び『八犬伝』以前の読み本を中心に—」『古典研究』16.1989、『滝沢馬琴集』全20巻・帝国文庫1990、をはじめとし多くの論考を参照させて頂いた。(本稿における最終閲覧日は2021.09.30)

20 岡本勝・雲英末雄編『新版近世文学研究事典』おうふう 2006.2 115頁を参照。

主人公の鎮西八郎為朝こと源為朝は、『保元物語』にも登場する巨漢で美男子の弓の名手としても名高い武将であり、同じ勸善懲惡の伝奇物語である『南総里見八犬伝』と並んで、馬琴の代表作とされる。作者である曲亭馬琴<sup>22</sup>については、明和四年(1767)六月九日に、江戸深川(現在の東京都江東区平野一丁目)の旗本・松平信成家の用人・滝沢運兵衛興義の五男として生まれている。寛政二年(1790)二十四歳で山東京伝に弟子入りを請うも断られたが、その後の人生において長く深い交流を続けることになった。また、この山東京伝からの紹介によって、寛政四年(1792)の三月、版元・蔦屋重三郎に見込まれ、手代として雇われることになった。この時、商人に仕えることを恥じた馬琴は、武士としての名を捨てて瑣吉と改名した。

その後、人気戯作家として、また山東京伝のよきライバルとして、多くの作品を世に送り出した。文化十年(1813)に京伝が読本界から引退した後は、文字通り馬琴の独壇場となり、数々の名作を発表し続けた。実生活においては一男と三女に恵まれたものの、息子や娘婿が相次いで他界し、馬琴自身も文化十一年(1814)には病の為に両目を失明してしまうのであった。しかし、負けず嫌いで有名であった馬琴は、盲目になった後も長男の嫁であるお路に、原稿を口述して書き取らせることで『南総里見八犬伝』の執筆を続けたのであった。嘉永元年(1848)、四谷信濃坂において、馬琴はその生涯を八十二歳の盲目の作家として閉じることとなった。

一方で、明代刊行の二系統の「楊家将演義」小説についてだが、前述の通り北宋時代に実在し「楊無敵」と称された北漢の名将・楊業(楊繼業・楊令公とも称す)と、その一族郎党の武勇伝と悲劇を虚実織り交ぜて、楊家代々の歴史故事として描いた唐山の演義小説である。馬琴周辺の記録の調査から、『新編水滸画伝』<sup>23</sup>編訳引書には、『一統志』や『金瓶梅』と共に『南北宋志伝』との書名が記載されており、馬琴が二系統の「楊家将演義」小説のうち、少なくとも『北宋志伝』には確実に目を通していたことを確認できた。次に、『椿説弓張月』冒頭に記載されている全十五首の絶句について、全十五首のうち十三首の題詞が『南宋志伝』または『北宋志伝』からの借用であることも確認している<sup>24</sup>。そして、この借用によって、馬琴が『椿説弓張月』を執筆するよりも以前に、二系統の「楊家将演義」小説の一つである『北宋志伝』と『南宋志伝』に目を通していた点までを確認できたのである。

本来であれば、これらの接点による二系統の「楊家将演義」小説と、曲亭馬琴や『椿説弓張月』との関

21 青木稔弥ほか編・横山邦治監修『読本研究文献目録』 溪水社 1993.10、大高洋司「八戸南部家の読本収集」『読本研究新集』6・2014.6による。この大高洋司氏によると、『椿説弓張月』の初印本は、早く日本古典文学大系60・61『椿説弓張月 上下』(後藤丹治校注、岩波書店、1958.8、1962.1)の底本となり、鈴木重三による詳しい書誌解題(「椿説弓張月の初版本について」、日本古典文学大系60所収)が附され、最も信頼に足る翻刻テキストとして今日に至っているとされる。更に、初印本と後印本を分ける最も大きな違いについては、初印本前篇巻之6の末尾に「(後篇を併せて)すべて十二冊を全本とす」とある執筆予定であったものが、後印本になって後、「三十冊」に変更されたことから、前・後篇の間に全体構想の大きな変化があり、その結果が冊数にも反映したことが分かる、としている。(大高洋司「『椿説弓張月』論—構想と考証—」『読本研究』第6輯上套、1992.9)。尚、本稿で使用する板本として、国立国会図書館集蔵本とした点については、「第一類A系本」(鈴木解題)の特徴に一致する点が多く、刷りの技巧の一部省略や合冊・疲れなどのマイナスは見られるが、揃いの早印本として初印本に継ぐ価値をもつ。(大高洋司「『椿説弓張月』論—構想と考証—」『読本研究』第6輯上套、1992.9・及び、「『椿説弓張月』の構想と謡曲「海人」「近世文藝」79、2004.1)との解説を参考とした。

22 曲亭馬琴の呼称については、別に滝沢馬琴という名も知られているが、本稿においては、高木元氏による、「滝沢馬琴」との呼称は明治以降に流布した表記であり、教科書・副読本などで「滝沢馬琴」と表記するものも存在するが、これは本名と筆名をつなぎあわせた誤った呼び方であるとの見解によって、曲亭馬琴との表記で統一して論を進めることとする。(高木元「放送大学「特別講義 人文科学 11」平成16年度第1学期」の講座内容による。また、「曲亭馬琴」は、戯作にのみ用いる戯号であって、幼名は春蔵、倉蔵、通称として左七郎、瑣吉、著作堂主人、笠翁、篁民、蓑笠漁隠、飯台陳人、玄同などを始めとして多くの別号を持ち、これらの別号は非常に厳格に使い分けていたとされる。

23 有朋堂文庫『新編水滸画伝』第一 有朋書店 昭和2年

24 平原真紀「近世日本に於ける「楊家将演義」小説の伝来」『東京外国大学国際日本学研究』2021.3

連についての調査であるため、『椿説弓張月』と『北宋志伝』との考察とすべきかもしれない。しかし、両作品の対比考察によって『楊家府演義』系板本のあらすじやプロットと、『椿説弓張月』における筋立てやモチーフの多くに、類似点であると推測できる箇所を複数確認していることから、ここはあくまで『北宋志伝』と『楊家府演義』の二系統の板本を共に調査対象として考察を進めるものとした。

そこで、まずはこの『椿説弓張月』冒頭の全十五首の絶句について、具体的に考察をおこなっていく。この十五首の漢詩については、合計十三首の題詞が『南宋志伝』または『北宋志伝』からの借用であったが、ここで注目すべきは、一部分の語句が書き換えられていた十首の漢詩の借用についてである。この二作品における挿入詩の対比表<sup>25</sup>からも、『南宋志伝』と『北宋志伝』から借用された漢詩が、他からの借用であることを一切明記せず、『椿説弓張月』で描かれている場面に沿った内容へと改筆された上で採録されている。その際、漢詩によっては元の七言律詩の「正格」での押韻を崩してまで、場面に合わせた内容へと改筆していたのである<sup>26</sup>。

この馬琴の漢詩採録の態度と改筆から、本節へと繋がる曲亭馬琴と『楊家府演義』編者である紀振倫の意外な共通点を見出すこととなった。それは、『北宋志伝』に採録された詠史詩を意識した紀振倫による『楊家府演義』での挿入詩採録の態度である。周知のように、紀振倫は、馬琴同様に『南宋志伝』や『北宋志伝』で使用されている詠史詩の原文を、それぞれが採録されている場面に合致するような内容へと語句の一部を改筆し、原詩の押韻を崩してまでも同一情節や同一場面に採録している。これら曲亭馬琴と『南北宋志伝』との接点、及び、『南宋志伝』や『北宋志伝』の挿入詩に対する馬琴と紀振倫の態度の一致という接点より、曲亭馬琴による紀振倫や『楊家府演義』に対する何らかの意図的な考えがあるのではないかと推測するに至った。

ここでもう一つ、馬琴と『楊家府演義』の接点を予想させる記述を提示したい。『椿説弓張月』後篇卷之六の識語には、次のような記述を確認できる。

#### 批為朝外傳弓張月

余嘗羅氏が三國志、及十二朝、武王、漢楚、隋史遺文、玄宗、五代史、岳飛、元明、國姓爺等の諸演義を閲するに、変化の奇、宛轉の妙、虚実相半せり。或はその言、荒唐に係るといへとも、亦史の闕文を補うことなきにあらず。

魁蕾子 識

この「魁蕾子」については、馬琴の号のひとつであり、読本の識語に「魁蕾子」と記されていれば、馬琴作品であることを示している<sup>27</sup>。馬琴は、この識語において、自身が羅貫中の『三国演義』や『十二朝(開闢演義)』、『武王(封神演義)』、『漢楚(兩漢演義)』、『隋史遺文』、『玄宗(隋唐演義)』、『五代史(殘唐五代史演義)』、『岳飛(岳飛伝)』、『元明(皇明英烈伝)』、『國姓爺』などの諸演義を閲覧してきたと述べている。だが、ここには先行研究で取り上げられている「水滸伝」関係の書籍名は見当たらない。

ここで注目したいのは、『五代史(殘唐五代史演義)』や『岳飛(岳飛伝)』などの書名である。この両作品は、『南北宋志伝』のうち、『南宋志伝』と大きく関わる作品であり、『楊家府演義』小説とも非常に深

25 平原真紀「近世日本に於ける「楊家府演義」小説の伝来」【図表一】『東京外国語大学国際日本学研究』2021.3

26 『椿説弓張月』冒頭の題詩と『南宋志伝』『北宋志伝』の挿入詩の対比表では、「十四」の漢詩が該当する。例えば、元の『南宋志伝』の漢詩では、第一句の最期が「俘」で、偶数句の「謨」、「塗」で「正格」の押韻だが、題詩の第一句の最期が「里」に改筆されている。

27 馬琴の号や異名については、菱岡 憲司「傀儡子から魁蕾子へ—馬琴異称にみる執筆意識の変化—」『近世文藝』日本近世文学会 2011 に詳しい。

い関係を有している。<sup>28</sup>また、これら中国の歴代王朝を描く演義小説群の中において、しかも、宋の太祖の登基までを描いた『岳飛伝』や、宋代の後の王朝を描いた『元明』まで記されているというのに、北宋時代を描いた「楊家将演義」小説だけが欠損していることは非常に不自然である。

この点について、後藤丹治氏は、中国の典籍で『椿説弓張月』に利用されたものが多くあると述べたうえで、「たとえ「援引書目」に記載があったとしても、ちょっと使われたに過ぎない場合もあり、作中に書名が示されていなくても弓張月の有力な材料となった作品も多くある」と述べている<sup>29</sup>。曲亭馬琴という作家が、幼少の頃より儒学や国学、諸子百家のみならず、稗史小説や繰人形浄瑠璃の台本、果ては医学書や経典に至るまで和書漢籍を問わず万巻の書を読破し、その知識の上に馬琴の諸作が誕生していることも既に多くの先行研究によって分析されている<sup>30</sup>。更には、諸所に存在する馬琴による「援引書目」や「読書記録」についても、『惜字雑箋』をはじめその全てが作品執筆に係る重要な参考文献というわけではないこと、参考文献等に記載のない作品で有力な執筆材料となったものもあることなども、既に多くの先行研究や史料により明らかとなっている。

他にも、この『椿説弓張月』という作品の骨格には、物語の最初の主人公である源八郎為朝の未来が、崇徳院の荒御魂によって暗示されるという情節が設定されていることや、その主人公の最期が白峯御陵の前で自死して果てるという設定など、二系統の「楊家将演義」の骨格を予感させるかのような設定の一致点がある。また、琉球編では、為朝の嫡男である舜天丸が主人公となって活躍しており、主役の代替わりが行われていることや、白峰以降のプロットには、超自然的で荒唐無稽な情節や妖怪、妖術に幽霊などが登場する設定も、基本的に二系統の「楊家将演義」小説との共通点として挙げられる点である。何より、物語の終盤では、崇徳院の荒御魂を借りて、馬琴の執筆姿勢である勸善懲悪や因果応報の理を滔々と述べさせてもいる。この点についても高藤武馬氏が、馬琴の読本から八郎為朝の人間像を思い浮かべることができない、馬琴の頭の中に理想の武将としての八郎為朝像があり、この歴史や忠義の武士への因果応報の理想化を阻まれることに対して、作品中で憤懣を表していることを読み取れるのみである、などと述べている<sup>31</sup>。

以上の考察によって、『椿説弓張月』には、『南宋志伝』『北宋志伝』の挿入詩が受容されているだけでなく、馬琴の性格や作風、世界観、漢詩の改作、なによりその勸善懲悪や因果応報などの理想世界への憧憬などからも、馬琴が『楊家府演義』にも目を通しては、との仮説を立てるに至った。そこで、次節においては、『椿説弓張月』と中国白話小説との関係、中でも『楊家府演義』の派生小説ともされる『狄青演義』と『椿説弓張月』との関連を述べている先行研究について確認し、両作品における世界観や作風、類似プロットを具体的に対比させて考察していく。

## 2. 『椿説弓張月』の概要と先行研究

前述の通り、『椿説弓張月』は、江戸時代に曲亭馬琴によって執筆された、近世日本において初めて中国演義小説の形態で描かれた作品である。「角書」に「鎮西八郎為朝外伝」とあるように、源為義の息子で源家の御曹司・為朝は、崇徳上皇の御代に実在した人物であり、『保元物語』では悲劇の武将・源為朝とそ

28 『五代史（五代史通俗演義）』や『岳飛（岳飛伝）』と『南宋志伝』との関係や受容については、上田望「講史小説と歴史書（2）—『残党五代史演義』、『南宋志伝』構造と変容—」『東洋文化研究所』第137冊1999.3に詳しい。

29 後藤丹治校訂『椿説弓張月』上下巻・日本古典文学大系・岩波書店1958.8 - 1962.1

30 曲亭馬琴の『椿説弓張月』に関連する先行研究については、各年代別に曲亭馬琴に関する論考をほぼ網羅するデータベースである、板坂則子「曲亭馬琴研究文献論文」（1988-1997）専修大学国文学古典学科デジタル資料ほかを参照させて頂いた。（本稿における最終閲覧日は2021.09.30）

31 高藤武馬訳『椿説弓張月』古典日本文学全集27・筑摩書房1960.8

の一族の物語として、兄義朝や平清盛を敵にし、「心飽くまで剛にして大力の強弓」を引き戦うも破れ伊豆大島に流刑、院宣を持った討伐軍に包囲され「今は思うことなし」と三十三歳でこの世を去った悲劇の武将として、現代日本においても絶大な人気と認知度を誇っている。

この源為義八男の御曹司、弓の名手であり巨漢の美男子として武勇を誇る源為朝が、物語冒頭から主人公になっている作品が『椿説弓張月』である。『椿説弓張月』に関する先行研究を分類する時、一、中国典籍との関連、二、日本史や日本文学との関連、三、琉球関連、の三つに大別できるのだが、中でも中国典籍との関連について、先行研究が粉本として挙げるのは『水滸伝』『水滸後伝』と『三国演義』であった。そんな中、本節において注目すべき論考として挙げられるのが、徳田武氏による「『椿説弓張月』と『狄青演義』」である<sup>32</sup>。

まず、この論考の主軸となっている『狄青演義』であるが、『五虎平西前伝』<sup>33</sup>と、『五虎平南後伝』<sup>34</sup>の二作品を総称する書名でもある。二系統の「楊家将演義」小説が明代万暦年間(1573~1620)の作品であるのに対し、『狄青演義』は清代嘉慶年間(1796~1820)の作品であり、実在の人物「狄青」をモチーフに描いているのだが、この『狄青演義』こそ、二系統の「楊家将演義」と非常に関係の深い派生作品なのである。常征氏によっても、『狄青演義』は「楊家将演義」の派生小説ともいえる作品<sup>35</sup>であり、作品の設定やプロットは『楊家府演義』と類似点が多く、『楊家府演義』での「狄青」は、主人公である楊家の御曹司を理不尽に陥れる悪役として登場するが、『北宋志伝』には登場していない。

確かに、二系統の「楊家将演義」小説のうち、『北宋志伝』は挿入詩として『椿説弓張月』に受容されていた。しかし、『北宋志伝』の単純明快な筋立てと大団円で物語の幕が下ろされる構成と、緻密な構成と複雑な筋立てで勧善懲悪を作風とする『椿説弓張月』とを読み比べる時、『北宋志伝』が『椿説弓張月』の本筋に受容されているとは到底言い難い。また、前述のように幼いころより万卷の書を読破し、常日頃より貪欲なまでに知識を求めた馬琴が、『北宋志伝』に記載されている「楊家府等伝」など、別の板本の存在を示唆する数多くの注を果たしてみすみす見逃すであろうか<sup>36</sup>。

また、『楊家府演義』は、当然ながら『狄青演義』との類似点を数多く確認できる。編者である紀振倫の、乱世の不条理を嘆き勧善懲悪を是とする執筆姿勢は、まるで「南京の馬琴」のようでもあり、『楊家府演義』と『椿説弓張月』の世界観もまた、『狄青演義』と『椿説弓張月』同様、非常に類似したものである。一方で、当時の唐船舶載書籍の取扱状況と、書籍が長崎に到着して江戸市中で流通するまでの時間<sup>37</sup>を鑑みる時、弓張月執筆時に馬琴の目に触れた可能性が低い清代嘉慶年間(1796~1820)刊行の『狄青演義』に対して、遅くとも明代万暦年間(1573~1620)には刊行され、日本においても享保年間(1716~1736)の

32 徳田武「『椿説弓張月』と『狄青演義』」『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店 昭 62.5

33 孫楷第目録(孫楷第『中国通俗小説書目』作家出版社 1957.1)によると、『五虎平西前伝』は、現存最古の板本として同文堂刊本が確認できる。北京大学図書館に収蔵されており、嘉慶六年坊刊本で題目を『新録異説五虎平西珍珠旗演義狄青全伝』と作る。清無名氏撰。首嘉慶六年序。大塚目録(大塚秀高『増補中国通俗小説書目』汲古書院 1987.5 増補)では、福文堂刊本と作る。

34 同じく『五虎平南後伝』についても、現存最古の板本として同文堂刊本が確認できる。北京大学図書館に収蔵されており、寶華順刊本で題目を『新鐫後續繡像五虎平南狄青全伝』と作る。清無名氏撰。巻首の序は、『五虎平西前伝』に同じ。前出大塚目録では福文堂刊本と作る。

35 常征『楊家将演義史事考』天津人民出版社 1920

36 『南宋志伝』や『北宋志伝』には、注釈部に「楊家府等伝」との記述があり、別板本の存在を示唆する注釈などが複数箇所確認できる。

37 江戸期における唐船舶渡書である漢籍の取り扱いや江戸市中に届くまでの経緯や手続きなど、江戸期における漢籍の流れについては、麻生磯次『江戸文学と中国文学』三省堂 昭 21.5.1、諏訪春雄・日野辰夫『江戸文学と日本』毎日新聞社 昭 52.2.10(1977)、中野三敏「漢文劇作の展開」『江戸文学と日本』毎日新聞社 昭 52.2.10(1977)、今田洋三『江戸の本屋さん—近世文化史の側面』平凡社ライブラリー 2009.11、高橋智『海を渡ってきた漢籍—江戸時代の書誌学入門』日外アソシエーツ 2016.6、中野三敏『江戸の板本』岩波書店 1995.12、ほかを参照した。

書籍目録等で書籍の渡来が確認できている『楊家府演義』は、当該時期には確実に当時の日本へ伝来していた板本でもある<sup>38</sup>。

徳田武氏は、この『椿説弓張月』と『狄青演義』において、『椿説弓張月』における『狄青演義』受容の可能性を述べており、それを示す有力な根拠として、『惜字雑箋』<sup>39</sup>にこの『狄青演義』の詳細な筋立てを書き残している点を指摘している。しかしながらその記述は、『椿説弓張月』刊行より二十年も後であり、『椿説弓張月』執筆時点での『狄青演義』読了は確認できていない。そもそも曲亭馬琴が『椿説弓張月』の脱稿以前に、より厳密に述べるならば『椿説弓張月』の作品構想時点において、前述の状況からも『狄青演義』を入手して読了することが可能であった、という見解には疑問を呈せざるを得ない。

曲亭馬琴が、『椿説弓張月』前篇を脱稿したのは文化二年(1805)十一月であるが、緻密な作品構成を作風としている点から執筆前の作品構成の期間を考えると、遅くとも脱稿の半年前には参考文献に大方目を通していていると考えられる。一方で、『狄青演義』の刊行は、『五虎平西前伝』が嘉慶六年(1801)<sup>40</sup>であるものの、『五虎平南後伝』嘉慶十二年(1807)<sup>41</sup>も合わせた『狄青演義』<sup>42</sup>をその時期までに江戸において入手、読了していた、と判断するのは難しいのではないだろうか。<sup>43</sup>そこで、もし徳田武氏が論じているように、『狄青演義』を受容した可能性があるならば、執筆構想の時期には既に江戸市中に板本があり、そもそも『狄青演義』とも多くの類似点を有する『楊家府演義』もまた、『椿説弓張月』に受容されている可能性があると思えても不都合は生じないであろう。

次の論拠として徳田武氏は、『椿説弓張月』と『狄青演義』が同じ「一代記」であるという点を挙げている。周知のように、『椿説弓張月』における「一代記構想」という視点は、『椿説弓張月』に関する先行研究において、中村幸彦氏による提唱以来、数多くの論考によって述べられてきたものである。<sup>44</sup>その為、『椿説弓張月』が受容している可能性を有する中国白話小説に関する論考において、この「一代記構想」という視点は、今の『椿説弓張月』の受容論には欠かせない視座となっていることは事実である。

この「一代記構想」について、筆者自身にも何ら異論があるわけではない。但し、この点については、従来述べられてこなかった新たな視点をひとつ提案したい。これまでの「一代記構想」に加えて、「家将小説」という新たな視点から『椿説弓張月』を捉える、という提案である。大塚秀高氏によると、「家将小説」とは「一族数代に亙る武将の活躍とその悲運を語り、これを鎮魂する役割をも担っていたと思われる小説群」である、とその定義を述べている<sup>45</sup>。この「家将小説」についての論考を見る時、呼延賛などの呼家将、高懐徳などの高家将、薛仁貴・薛丁山の薛家将、などがその代表として挙げられる。

38 当時の漢籍輸入については、大庭脩著者兼編輯『江戸時代における唐船持渡書の研究』 関西大学東西学術研究所 昭和 41.11、大庭脩『江戸時代の日中秘話』東方選書 5 東方書店 1980.5、大庭脩『漢籍輸入の文化史—聖徳太子から吉宗へ—』研文出版 1997.1『漢籍輸入の文化史—聖徳太子から吉宗へ—』研文出版 1997.1、大庭脩『漂着船物語—江戸時代の日中交流—』岩波新書 2001.8、中野三敏『江戸文化再考—これからの近代を創るために』笠間書院 2012.7 ほか、を総合的に参照した。

39 早稲田大学所蔵 瀧澤馬琴『惜字雑箋』1802 - 1838

40 福文堂板本。北京図書館、首都図書館に蔵書あり。

41 現存最古の板本として確認されているのは、聚錦堂刊本（前伝も刊行）。東京大学東洋文化研究所倉石文庫に蔵書。

42 前注 32,33 を参照。

43 この時代の漢籍が唐船で長崎へ運ばれてから、齋来目録や大意書による書物改めを経て、江戸市中の庶民階層の手にも触れるまでの所要年数から類推した。『狄青演義』の後半である『五虎平南後伝』刊行までのタイムラグをほとんど考慮せず、一般の娯楽書でなく史書や医学書類であったとしても一年前後の時間を考慮すべきであり、例えば『狄青演義』刊行後に、最短の流通経路を辿って、版元の李雨堂、もしくは同文堂や福文堂から上海船か福建先船、または寧波船に搭載され、長崎での齋来目録や大意書の作成、及びこれら書目類の江戸への搬送、江戸詰めのお中による見分と、その後の許可を経て、江戸市中に書籍が届くまでの漢籍輸入に係る一連の手続きを含む。その上で、他の通俗小説などの書籍輸入の実例などからも総合的に勘案し、非常に厳しいと判断したものである。

44 中村幸彦「椿説弓張月の史的位罫（滝沢馬琴）」『文学』36 1968.3

45 大塚秀高「歴史物語の育成と発展—高家将物語を中心に」埼玉大学紀要教養部 2017

確かに、『椿説弓張月』前篇刊行時、馬琴が一代記構想を掲げて刊行した作品ではある。しかし、第一巻目の執筆当初は前後編全十二巻の予定であったものの、その後次々と続編が刊行され、最終的には当初の予定を大幅に超える長編小説となったのもまた事実である。後藤丹治氏によると、この『椿説弓張月』という作品は、文化四年(1807)にまず『前篇』が刊行され、それ以後、足掛け四年の歳月をかけて、『後篇』、『続篇』、『拾遺』、そして『残篇』が陸續と刊行、最終的には、全五篇、二十九冊でやっと完結をみた超長編作品となったとされる。また、その理由として、『椿説弓張月』の第一冊の刊行当初は、前篇と後篇の全十二巻で完結予定であったのだが、第一冊出版後に予想以上の大反響があり、これによって馬琴の筆が伸び、作品の完結も幾度にも渡って延期を繰り返したとも述べている。<sup>46</sup>

しかも、この『椿説弓張月』後半の琉球編に至っては、もはや実質的な主人公として活躍するのは為朝ではなく、源家次世代の御曹司である舜天丸や他の子供たちである。これはまさに「源家三代とその一族郎党をめぐる悲劇の物語」、つまり源家の「家将小説」であると言える作品であろう。本稿で取り上げている「楊家将演義」小説もまた、楊家と一族郎党の「家将小説」であり、この視座を持つことで両作品の関係に更なる可能性を予測できると考えた。

つまり、刊行当初の『椿説弓張月』が、たとえ「一代記」構想のもとに執筆されていても、馬琴が一代記の作品だけを執筆時の参考文献とした訳ではなく、前編刊行当時の構想は、作品が人気を博すほどに連載期間を延長することとなり、新プロットを企画して本筋を修正しつつ加筆するという変更を余儀なくされていったとも捉えられるだろう。ならば、『椿説弓張月』に対する新たな視点として、源家三代とその一族郎党の悲劇を描いた「家将小説」であるという点からも本作品を捉えられるのではないか。以上の新たな視点を踏まえた上で、徳田武氏が『狄青演義』受容の論拠として挙げている点について、氏の論証方法を参考としつつ『椿説弓張月』と『楊家府演義』の両作品の類似点について、更なる考察をおこなっていく。

### 3. 『椿説弓張月』における『楊家府演義』受容の可能性

「『椿説弓張月』には『楊家府演義』を受容している可能性がある」との推測が成り立つということは、換言するならばそれは、徳田武氏が「『椿説弓張月』と『狄青演義』」において論拠としている点が、『楊家府演義』にも全て該当するという点でもある。前節においては、徳田武氏の論考において、『椿説弓張月』が『狄青演義』を受容している論拠として挙げていた『狄青演義』の刊行年代や、『惜字雑箋』に『狄青演義』の詳細な筋立てを書き残している点について、『狄青演義』と二系統の「楊家将演義」小説の関係と刊行順序や年代、さらに「一代記構想」に対しては、「家将小説」という新しい視座から、『楊家府演義』にも同等の可能性のあることを述べてきた。

本節では、徳田武氏が論拠としている点について更なる考察を試みる。先述した論拠のほかに徳田武氏は、人物設定や重要モチーフやプロット、情節の対比、作品主題や世界観の同一性を、重要な論点として挙げて考察している。それは、

- ①「敵対者が主人公に迫害を加え、遠隔地にある物を取りにやらせる」プロット
- ②「義兄弟のような忠臣達」という設定
- ③「遠隔地において武勇ある美女を妻にする」情節
- ④「不遇の英雄である主人公に、次々に襲い掛かる艱難辛苦」という設定
- ⑤「天空から雲に乗って現れる巨漢で真っ赤な妖怪」という登場人物

46 後藤丹治校注『椿説弓張月』上 岩波書店 1958.8

の五点であるが、この設定は全て『楊家府演義』にも当てはまる。

設定①については、楊文広の東岳参拝のプロットが該当し、②についても、楊家代々の御曹司たちには、例えば楊六郎には孟良と称賛、楊文広と魏化など、必ず忠義の腹心たちが控えている点で当てはまる。③についても、楊文広の比武招親の段がまさにそれである。また、この①や③のプロットはどちらも、『楊家府演義』にのみ描かれているプロットである。更に、④は、二系統の「楊家将演義」小説がそもそもの作品骨格として有している設定であり、⑤にいたっては、二系統の「楊家将演義」小説における共通プロットである七十二座天門陣そのものであるといえることができる<sup>47</sup>。

尚且、これらの設定は全て、そもそも『楊家府演義』と『狄青演義』の作品の成立ちと関係からは、当然のことばかりといえることができる。では、『楊家府演義』においても、具体的にどのような点が、どの程度類似しているのだろうか。ここで、『椿説弓張月』と『楊家府演義』の類似プロットや情節について、前掲①から⑤も含めて顕著にその類似を読み取れる点を、いくつか具体的に指摘したい。

### (1) 譜代の佞臣による迫害と流刑

『椿説弓張月』に描かれる、信西入道ら佞臣による度重なる理不尽な迫害や流刑、一族の不遇を嘆きつつも武士の本分を貫き続ける為朝や一族郎党だが、『楊家府演義』二十一則でも、佞臣による度重なる理不尽な迫害や流刑に、一族の不遇を嘆きながらも、武士としての忠義や先祖に対する孝心から立ち上がる楊六郎や一族郎党の姿が描かれている。また、『楊家府演義』に通底する、主人公達が時の権力の身勝手さを憂い、一族の不遇を嘆く姿は、単純明快な筋立てで人気を博した『北宋志伝』には見られない細やかな心理描写である。

### (2) 主人公の身代わり死体

『椿説弓張月』では、伊豆大島で為朝が窮地から脱出するために自身の身代わり死体を用意する場面が描かれているが、『楊家府演義』二十則でも、楊六郎が流刑地で佞臣の配下の者たちの暗殺から逃げるために、身替り死体を準備する場面が描かれている。

### (3) 仙桃と兵法書

『椿説弓張月』では、為朝の息子であり、為義から三代目の御曹司である舜天丸が、窮地に陥った岩山で仙人から仙桃と兵法書を授けられる場面が描かれているのは、周知のことである。この「山中で仙桃と兵法書を授けられる」情節も、『楊家府演義』二十三則に記載がある。この二十三則の即題も「宗保遇神授兵書」で、兵法書を授けられることを示唆している。この情節では、山中で窮地に陥った宗保が、仙女に出会って仙桃を口にして不思議な力を身に付け、敵軍を破るための兵法書を授かり、ついに敵陣を破るまでの活躍が描かれている。

### (4) 弓矢の腕比べ

弓矢の腕比べといえ、為朝が信西入道に陥れられ松の木の下に立ち、次々射かけられる矢を見事に掴み、最後の一本は口で喰い止め、鏑をかみ砕いてしまう情節が有名である。『楊家府演義』では三十五則、宴席において敵の将軍が弓矢の腕比べを言い出し、楊家の忠臣である孟良が柱に縛られ、近距離か

47 『北宋志伝』（『南宋志伝』を含む）と『楊家府演義』の各プロットやモチーフに関しては、平原真紀「明刊本《楊家将演義》小説の基本問題—《北宋志伝》と《楊家府伝》の二系統とその対比—」『言語・地域文化研究』東京外国語大学大学院博士後期課程論叢 第20号 2014.1 に詳しい。

ら矢を次々に射かけられる。孟良は、その矢を自分の頭をひねっては避け、手で掴んでは止め、最後に飛んできた矢を口で受け止めるまでを詳細に描いている。この矢を口で噛み折って止める「弓矢の腕比べ」エピソードは、「楊家将演義」との関係性を指摘される『水滸伝』などにも受容されており、中国白話で広く目にする情節でもある。

#### (5) 勅命による遠征と次々現れる美しい押しかけ妻

『椿説弓張月』では、為朝が勅令により仙鶴を捕まえに琉球まで遠征し、その先々で勇猛果敢で美しい美女が次々と現れては為朝に迫り、一夜を共にしてはそのまま妻となる。この情節は、『楊家府演義』でも比武招親<sup>48</sup>と称される有名な情節である。『楊家府演義』四十六則では、楊文広は勅命を受けて、強奪された宝物を奪還すべく東岳へと遠征する。その長い旅路の途中、地元有力者や山賊の美しく武勇に秀でた娘達が、次々と楊文広に一目惚れをしては一夜の契りと結婚を迫るといふ、非常に類似したプロットが存在する。

以上のように、徳田武氏が論拠としている類似点以外にも、主要な類似プロットや情節の一例を提示したが、この他にもまだ数多くの類似点となるモチーフを挙げる事ができる。それは、例えば、主人公の設定がどちらも皇室に連なる血筋を持ち、巨漢で弓の名手と謳われる眉目秀麗な名家の御曹司であることや、戦場での非業の自死、仙鶴や真珠の珠、雲に乗る怪しく醜い妖怪、流浪中に出逢う忠臣たちや、彼らの非業の死など、その類似点は枚挙に遑がない。何よりも、『椿説弓張月』に通底する乱世の不条理を嘆く世界観や、主人公を迫害した佞臣たちが最後に必ず因果応報の報いを受ける点などは全て、『北宋志伝』には見られない、『楊家府演義』だけが有する特徴である。

#### おわりに

本稿ではまず、近世日本文学における長編講史小説の代表作のひとつである『椿説弓張月』について、その出版時の状況や書名についての解説を含む概要を整理した。次に、二系統の「楊家将演義」小説について、考察に必要な部分の概要と二系統の板本の関係性、近世日本への伝来調査の結果を再確認した。中でも、『南宋志伝』と『北宋志伝』の挿入詩が十三首、馬琴『椿説弓張月』冒頭の全十五首の題詩の中に典拠を明記されることなく借用されていること、この借用方法が『楊家府演義』の編纂者・紀振倫と酷似していること、そして、『北宋志伝』の注釈などに「楊家府等伝」等という関連書籍の存在が記載されており、馬琴が確実にそれを目にしているはずであること、などの点から『椿説弓張月』に二系統の「楊家将演義」小説が受容されているのではないかと推測するに至った。

更には、両作品に共通する設定やモチーフ、勸善懲悪の作品観などが、『楊家府演義』と共通しており、馬琴という人物が、自身が目を通し、作品を執筆する際に参考にした文献のすべてを正直に書き出すわけではないという点から、『椿説弓張月』に「楊家将演義」小説のうちの『楊家府演義』が受容されている可能性を予測し、考察をおこなった。『椿説弓張月』と中国白話に関する先行研究においては、『椿説弓張月』と『楊家府演義』の派生小説である『狄青演義』との間に受容関係がある、とする徳田武氏による論考に注目し、この先行研究から『狄青演義』と「楊家将演義」小説の成書過程を含む関係性や刊行順序などを論拠に、『椿説弓張月』に『狄青演義』を受容した可能性があるのであれば、『狄青演義』がその粉本とした『楊家府演義』にもその可能性があるのではないかと考えた。

48 「比武招親」は「花関索伝」（『成化歌唱詞話』）などにみられるが、松浦智子「『楊家将演義』における比武招親について—その租形と傳承をめぐって—」『中国文学研究』31 早稲田大学中国文学會 2005 に詳しい。

そこで、徳田武氏の論考を参照し、『椿説弓張月』と『狄青演義』の関係に、『楊家府演義』がどれほど同じ同一性を見出せるのかについて、二系統の作品の設定やプロット、情節やモチーフについて、ひとつひとつ丹念に対比考察をおこなうこととした。具体的な作業としては、徳田武氏が『狄青演義』受容の論拠として指摘している点の全てを、『楊家府演義』のそれと対照させて確認をおこなった。徳田武氏が論拠とした点については、まず、馬琴が『狄青演義』に目を通したとされる記録は、『椿説弓張月』執筆の相当後の年代であることが判明した。次に、『椿説弓張月』と『狄青演義』は、確かに「一代記」であるという共通点があるものの、『椿説弓張月』に描かれているのは、源家三代の武勇と悲劇を描いた事跡であり、また、物語後半には妖術飛び交う荒唐無稽なプロットが存在することなどから、『北宋志伝』や『楊家府演義』と同じ「家将小説」として捉えてもよいのでは、との新たな視座を提案した。

さらに、徳田武氏がその共通点として挙げていた様々な設定やモチーフ、プロットの全てが、そもそも『狄青演義』の粉本であった『楊家府演義』にも全て当てはまることを確認した上で、実際に『椿説弓張月』と『北宋志伝』にはないが『楊家府演義』にはある共通点についても、設定やプロット、モチーフ、作品観についての具体例をあげて考察をおこなった。この一連の考察によって、徳田氏の論拠を超える具体的な論拠、例えば、『楊家府演義』の書名を馬琴に関連する史料に確認できた、等の成果は見られなかったものの、徳田武氏が論拠としている点と同等の論拠が『楊家府演義』にもあることを確認するに至った。

特に、『狄青演義』の刊行年からは、馬琴が『椿説弓張月』執筆以前に『狄青演義』に目を通していた可能性は、非常に低いと言わざるを得ないと判断した。この点も加味するならば、馬琴が『椿説弓張月』を執筆する以前に確実に日本へ渡来しており、且、江戸市中に確実に存在した『楊家府演義』を受容した可能性の方が、より高いと考えてもよいのではないかとの結論に至ったのである。この、『椿説弓張月』における『楊家府演義』受容の可能性については、今後、まだ多数存在する未確認の漢籍目録や蔵書目録、また、馬琴周辺の資料を更に精査する必要がある。その調査によって、『楊家府演義』や『楊家将演義』などの書目名を、当時の資料において確認することで、本稿で提示した『椿説弓張月』における『楊家府演義』受容を裏付けるより具体的な論拠として提示できると考えている。

以上の考察結果から、たとえ生きる時代も国も全く異なっていたとしても、『楊家将演義』の編纂者である紀振倫と『椿説弓張月』の作者である曲亭馬琴には、人生に対するまなざしや刊行書籍に込める執筆編纂意図に共通する点が多く、その受容を想定し得る可能性として提示するものである。

平原 真紀(ひらはら まき) Hirahara, Maki

東京外国語大学 大学院国際日本学研究院 特別研究員

## 付記

本論文は、2021年3月に東京外国語大学大学院総合国際学研究所へ提出した博士論文の一節を基として、大幅な修正を施したものである。

## 主な板本・テキストと参考文献一覧

主な板本・資料・目録など

- ・国立国会図書館所蔵経国堂『玉茗堂批點繡像南北宋志傳』
- ・東北大学所蔵維経堂『玉茗堂主人按鑑批點南北宋志傳』
- ・国立故宮博物院『楊家府世代忠勇演義志傳』
- ・国立国会図書館所蔵『鐫出像楊家府世代忠勇演義志傳』

- ・曲亭馬琴・高山蘭山編訳「新編水滸画伝」『水滸画伝』朋友堂文庫朋友堂書店 昭和2年
- ・国立国会図書館蔵・春江堂『椿説弓張月』1911年
- ・瀧澤馬琴『惜字雑箋』1802 - 1838（早稲田大学蔵）
- ・孫楷第『中国通俗小説書目』作家出版社 1957.1
- ・大塚秀高『増補中国通俗小説書目』汲古書院 1987.5 増補

ほか

### 主な参考文献

- ・坪内逍遙・水谷不倒共編『近世列伝体小説史』上下巻(暁霞処士「曲亭馬琴」を含む)春陽堂 1897.5
- ・衣田学海『椿説弓張月細評』帝国文庫39・1899
- ・藤岡朔太郎「近代小説史」大倉書店1917.1
- ・常征『楊家将演義史事考』天津人民出版社1920
- ・島崎藤村「馬琴の研究」藤村作・新潮社版日本文学講座第十巻所収 昭6(1931)
- ・麻生磯次『江戸文学と中国文学』三省堂 昭21.5.1
- ・後藤丹治校注『椿説弓張月 上』岩波書店1958.8
- ・高藤武馬訳『椿説弓張月』古典日本文学全集27・筑摩書房1960.8
- ・中村幸彦『中村幸彦著述集 第5巻』中央公論社 昭57
- ・後藤丹治校訂『椿説弓張月』上下巻・日本古典文学大系・岩波書店1958.8 - 1962.1
- ・高藤武馬訳『椿説弓張月』古典日本文学全集27・筑摩書房1960.8
- ・大庭脩著者兼編輯『江戸時代における唐船持渡書の研究』 関西大学東西学術研究所昭和41.11
- ・大庭脩著者兼編輯著『江戸期における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所 昭42
- ・中村幸彦「椿説弓張月の史的位罫(瀧沢馬琴)」『文学』36 1968.3
- ・諏訪春雄・日野辰夫『江戸文学と日本』毎日新聞社 昭52.2.10(1977)
- ・中野三敏「漢文劇作の展開」『江戸文学と日本』毎日新聞社 昭52.2.10(1977)
- ・大庭脩『江戸時代の日中秘話』東方選書5 東方書店1980.5
- ・麻生磯次『瀧沢馬琴』人物叢書・日本歴史学会編集・吉川弘文館1987.10（初版昭18）
- ・高田衛「馬琴・南北における一典拠」『都大論究』25.1988
- ・徳田武『「椿説弓張月」と『狄青演義』』『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店 昭62.5
- ・土岐和美「読本における『水滸伝』の受容-『八犬伝』及び『八犬伝』以前の読み本を中心に-」『古典研究』16 1989
- ・『瀧沢馬琴集』全20巻・帝国文庫1990
- ・大高洋司『「椿説弓張月」論一構想と考証一』「読本研究」第6輯上套、1992.9
- ・青木稔弥ほか編・横山邦治監修『読本研究文献目録』溪水社 1993.10
- ・中野三敏『江戸の板本』岩波書店1995.12
- ・高木元「江戸読本の形成一貸本屋の出板をめぐって一」『文学』56 『江戸読本の研究』1995
- ・大庭脩『漢籍輸入の文化史一聖徳太子から吉宗へ一』研文出版1997.1
- ・上田望「講史小説と歴史書(2)一『残党五代史演義』、『南宋志伝』構造と変容一」『東洋文化研究所』第137冊1999.3
- ・橋本眞一「曲亭馬琴伝記小攷一 曲亭馬琴旧蔵本『鎖国論』・石川豊翠旧蔵本『松窓雑録』について」『読本研究新集』第二集・読み本研究の会・翰林院書房2000
- ・大庭脩『漂着船物語一江戸時代の日中交流一』岩波新書2001.8

- ・井上進『中国出版文化史』名古屋大学出版会2002.1
- ・小松謙『中国歴史小説研究』汲古選書 平成13
- ・大高洋司「『椿説弓張月』の構想と謡曲「海人」」「近世文藝」79、2004.1
- ・大木康『明末江南の出版文化』研文出版2004.5
- ・常毅「元明期“楊家将”戯曲小説研究」『暨南大学』2005
- ・松浦智子「『楊家将演義』における比武招親について—その租形と傳承をめぐって—」  
『中国文学研究』31早稲田大學中國文學會2005
- ・岡本勝・雲英末雄編『新版近世文学研究事典』おうふう2006.2
- ・橋本眞一「『椿説弓張月』論」『日本文学研究』(46)大東文化大学2007.2
- ・今田洋三『江戸の本屋さん—近世文化史の側面』平凡社ライブラリー2009.11
- ・中野三敏『江戸文化再考—これからの近代を創るために』笠間書院2012.7
- ・菱岡 憲司「傀儡子から魁蕾子へ—馬琴異称にみる執筆意識の変化—」『近世文藝』日本近世文学会  
2011
- ・平原真紀「小説『楊家将演義』再考—《北宋志伝》と《楊家府伝》」『中国俗文学研究』中国俗文学研究会  
2013.4
- ・平原真紀「明刊本《楊家将演義》小説の基本問題—《北宋志伝》と《楊家府伝》の二系統とその対比—」  
『言語・地域文化研究』東京外国語大学大学院博士後期課程論叢 第20号 2014.1
- ・大高 洋司「八戸南部家の読本収集」『読本研究新集』6 2014.6
- ・大塚秀高「『楊家将演義』前後の歴史小説」『楊家将演義 読本』2015.6
- ・平原真紀「明刊『北宋志伝』板本による楊家将小説の完全邦訳」『東方』2016.1
- ・高橋智『海を渡ってきた漢籍—江戸時代の書誌学入門』日外アソシエーツ2016.6
- ・大塚秀高「歴史物語の育成と発展—高家将物語を中心に」埼玉大学紀要教養部2017
- ・平原真紀「二系統の明刊本「楊家将演義」小説における共通底本の可能性—『北宋志伝』と『楊家府演  
義』の二系統をその対象に—」『樹間爽風』和漢韻文研究会2021.12.25
- ・平原真紀「近世日本に於ける「楊家将演義」小説の伝来」『東京外国大学国際日本学研究』2021.3

ほか

### 主なデジタル資料ほか

- ・板坂則子「曲亭馬琴研究文献論文」(1988~1997)『専修国文』(通号 64)1999.01  
国立国会図書館デジタル<http://id.ndl.go.jp/bib/000000013618>
- ・専修大学内人文系データベース  
<http://www.senshu-u.ac.jp/School/kokubun/kotengakka2/itasaka-bunken.htm>

ほか

